

「全鍍連」 2019年8月号 いきいき地域

静岡県鍍金工業組合 古林 克匡 (株)日広鍍金工業所 代表取締役社長)

「今川義元の復権」

静岡県鍍金工業組合の古林と申します。この度はとても良い機会を頂きましたので、私の住む静岡市に所縁がある「今川義元」をご紹介させていただきます。

2019年は「今川義元公生誕五百年祭」としていくつかの記念事業が静岡市で開催致しました。駿府、現在の静岡市は義元公を中心とした「今川時代」と家康公の「大御所時代」に大きく繁栄致しました。今川文化の最盛期を築いた義元公は京文化に精通し、領国経営にも優れた武将であったと言われています。その義元公が治めていた駿府で教育を受け元服を迎えた家康公が、後にこの地で首都機能を担う国際都市を創りあげた事は、「今川から徳川」と続く「歴史の連続性」を示しています。ですが、義元公の功績や知名度はそれほど高いものではありません。戦国武将と言えば織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三人が特に有名でその次に武田信玄、上杉謙信、さらに伊達政宗、真田幸村らの人気が高いです。義元公といえば桶狭間の戦いにおいて、2万5000という大軍を擁しながら、わずか2000の織田信長に敗れてしまい、そのことから「公家かぶれの凡将」と揶揄されています。しかしながら今川義元は同時代の武田信玄、上杉謙信と同格以上の力を持つ大名であり、川中島の戦い第二回戦では間に入り両者を停戦させ、景虎（上杉謙信）と晴信（武田信玄）は和睦となりました。また、室町幕府将軍 足利義晴から義元は名前の上の「義」をもらい信玄（晴信）が下の字だった事にも、格の違いが示されています。その他にも義元の素晴らしい功績として、武田晴信（信玄）、北条氏康、今川義元の三人の国主が一同に会し「甲相駿三国同盟」が締結されました。この会議が後に、戦国期外交史上の奇跡と言われた「善得寺の会盟」であります。そしてこの締結の裏には今川義元の功績と共に大きな立役者がいました。今川義元の軍師・大原宗孚雪斎です。雪斎は臨濟寺で幼少期の松平竹千代（徳川家康）の教育係を8歳から19歳までの11年間努め「幼少より臨濟寺の雪斎にたより、兵書を読習給ふ」とあり、家康は将来のリーダーとしての心構えを徹底して教え込まれ、後に天下人となりました。義元も幼少の時から雪斎に教えを頂いており義元の才覚をより一層引き立てました。そしてこの義元、雪斎の二人で今川文化の最盛期を作り上げていきましたが、残念ながら雪斎は桶狭間の戦いの5年前に亡くなってしまいます。桶狭間の戦いに雪斎がもし生きていれば、時代が大きく変わっていたとも言われております。桶狭間の戦いで義元が織田信長勢に討たれてしまった要因の一つに「馬にも物れず、輿で出陣し、それが信長勢に義元がいる場所が目印となった」と言われていますが、足利將軍家から「外出の時は輿に乗ってよい」と特別許可を与えられていた義元は、信長勢に対して、圧倒的な格の違いを見せようとしての行

動でした。戦国大名としての義元は文句無くトップレベルでしたが、桶狭間の戦いでは、信長勢に打ち取られた事は確かであり、これは信長の戦略、戦術が大変素晴らしかったと思われれます。義元にとって大変残念な結果となりましたが、桶狭間の戦いで信長は、義元に対してとても深い敬意を込め、義元の愛刀「義元左文字」を磨り上げて「本能寺の変」で横死するまで片時も離さなかったそうです。そして「義元左文字」のその後は豊臣秀吉から秀頼、そして徳川家康へと渡り、家康は大阪の陣では「義元左文字」を帯びて出陣したと言われております。まさに信長、秀吉、家康の三者が手にした「天下取りの刀」。義元は桶狭間で夢破れましたが、別の形で義元の意味は伝わっていったと思います。今回取り上げさせて頂いた「今川義元」少しでも興味が湧きましたら、是非静岡にお越し頂き今川家の菩提寺、竹千代時代の徳川家康が人質として預けられた「臨濟寺」、今川義元の母が眠る「龍雲寺」、今川氏親公の菩提寺「増善寺」そして雪斎が余生を過ごした「長慶寺」に行かれて、今川の歴史を辿ってみて頂きたいと思ひます。